

接続助詞「から」と「ので」について

三井 昭子

外国人に対する日本語教育においては、接続助詞「から」と「ので」を「原因、理由を表す言い方」としてまとめ、初級段階で両者を同時に教えている。ところが、両者の使い分けについての根拠のあいまいさと現実の言語生活における「から」と「ので」の使用状況の煩雑さに、教わる側である外国留学生たちが、困惑を覚えているのも事実なのである。

私は、現代の言語生活における「から」と「ので」使用に関する規範的なものを、いくらかでも得ることができればと、実際の用例に基いて、両者の使用状況を調べてみた。

用例採取に使用した資料は、二葉亭四迷、「浮雲」(新潮文庫)夏目漱石「門」(岩波文庫)森鷗外「青年」(新潮文庫)大岡昇平「事件」(新潮社)「現代短篇名作選9」(講談社文庫)の各々全文(但し「事件」における判決文の部分は割愛した)及び朝日新聞朝刊「ビデオテープ」欄50日分である。なお、文末用法の「から」及び会話的文章のうち「心中語」については、今回の調査対象から除外した。

I 「から」及び「ので」の使用状況

まず、「から」及び「ので」の発生について、簡単に触れておきたい。「から」に関しては、古代に使用された接続助詞「からに」及び動作、作用の起点を示す格助詞「から」の2つの流れが、共存しながら室町時代に至って、接続助詞に転じたという説(注1)が最も妥当だと考える。「ので」については諸説(注2)があるが、「ので」の前段階に連体形に直接する「で」(物を申すで、くたびれた。ロドリゲス日本大文典)があり、準体助詞「の」を介して接続助詞に発展したという説(注3)に従いたいと思う。

「から」及び「ので」の違いについての通時の研究には、吉井量人氏の「近代東京語因果関係表記の通時的考察—「から」と「ので」を中心として—」(注4)がある。氏は1700年以降の口語体文学作品111を15の資料群に分け、会話部分について用例を採取された。その結果、

a. 「から」が文学作品の中で、会話文に使われはじめるのは、1700年ごろからである。

b. 1760年ごろ（明和ごろ）から「から」が条件表現形式の中心となる。（約8割を占める）

c. 1800年前後から「ので」が散見されるようになり、1850年ごろ（安政ごろ）から「ので」の一応の位置が確立したと考えられる。

d. 1890年には「ので」の使用率が高まり（約1～1.5割）定着した。と結論をだされている。

私は、「ので」定着以後の「から」及び「ので」の使用状況を知るために、先述した5つの資料における「から」「ので」の使用実態を、各々、地の文と会話文に分けて調査した。まず、「から」及び「ので」の使用数についての調査結果は次の通りである。

表 I

		浮雲	青年	門	現短	事件
地の文	か	44	11	47	121	114
	ら	51%	16%	23%	52%	52%
	の	43	56	158	110	105
	で	49%	84%	77%	48%	48%
会話文	か	135	35	72	66	158
	ら	98%	83%	92%	89%	73%
	の	3	7	6	8	58
	で	2%	17%	8%	11%	27%

％は「から」と「ので」の割合を示す。

表 I で明らかなように、地の文における「から」と「ので」の使用比率は「浮雲」では約1対1、「青年」では約1対9、「門」では1対4「現短」「事件」では約1対1である。一方、会話文では、大部分が「から」であり、「ので」が使われているのは「浮雲」で3例、「青年」7例、「門」6例、「現短」6例に過ぎない。「事件」のみが58例で、やや多いが、これについては後述したい。

「ので」の定着について、詳細に調査された原口裕氏はノデの熟合が顕著になるのは、安政期以降明治にかけてで、明治10年代に及んで、十分なる

定着を見るに至った」(注5)と述べ、斉藤緑雨の「油地獄」(明治24年)において「から」使用数23に対し「ので」使用数75となり、いわゆる「ので専用体」は完全に定着したとみておられる。そして、この「ので専用体」について「江戸語と近代文章語の明確な差を示す事実である」と述べておられる。

私は表Ⅰの結果から「ので専用体」を単に「から」と「ので」の使用数の問題だけではなく、地の文においては専ら「ので」を使用し、会話文では「から」を使用するという両者の使い分けが定着した状態と解釈したいと思う。この原則からいうと「青年」「門」(いずれも明治43年)では「ので専用体」が確立しているといえるが、「浮雲」(明治20年～22年)では、地の文における「から」の使用率が高く「ので専用体」はまだ完全には確立していないといえる。原口氏の調査とも併せて考えると、「ので専用体」の確立は、少なくとも明治22年以降、明治25年前後ということになるのであろうか。

ところで、「事件」「現短」では、地の文における「ので」の使用率が下がり、「浮雲」とほぼ同率になっている。これは「ので専用体」の崩壊ともいえる現象であり、注目される。「事件」は昭和5年に、「現短」の作品はすべて昭和44年以降に書かれている。「現短」において、地の文に「ので」よりも「から」を多く、あるいは同数使用している作家は、古井由吉(生年昭和12年以下同)山本道子(同11年)富岡多恵子(同10年)野坂昭如(同5年)日野啓三(同4年)など、主に昭和生れの比較的若い世代の作家たちである。上林暁(明治35年)舟橋聖一(同37年)井上靖(同40年)中里恒子(同42年)など明治生れの作家たちは、地の文では「ので」を多く使っており、「ので専用体」の原則に従っていることがわかる。これは、若い世代の作家たちが、従来の文章規範にとらわれない、自由で個性的な表現を目指していることの現れともいえるかもしれない。

会話における「ので」の使用例は常に少なく、現代に至っても、その傾向は続いている。例外的な「事件」における「ので」の多用は、この作品が法廷場面を多く持っていることと関係している。会話における「ので」使用数58のうち、53までが法廷における被告人、証人、弁護人の陳述である。改まった場で、発言する場合は「から」よりも「ので」を使うという一面が

あることを、物語っている。

表 II

		上林 曉	舟橋 聖一	耕 治人	井上 靖	北原 武夫	中里 恒子	結城 信一	古山 高麗雄	田久保 英雄	日野 啓三	野坂 昭如	李 恢成	富岡 多恵子	坂上 弘	山本 道子	古井 由吉	合 計
地の文	から	9	1	16	2	0	2	5	13	5	5	37	1	13	1	6	5	121
	ので	20	7	13	5	0	3	2	14	10	4	1	3	5	14	6	3	110
会話文	から	1	12	4	2	1	9	1	1	1	8	0	1	18	2	1	4	66
	ので	0	0	0	0	3	4	0	0	0	0	0	0	1	0	0	0	8

会話における「ので」の使い方を分類してみると、大部分が次の3つに分類される。

(1) 改まった、かたい表現として使われているもの。

例 1. 「人を殺した後なので、膝がガクガクしていたのでしょう。」

(「事件」証人の証言 101 ページ)

例 2. 「この証人は、あとで弁護側の証人として、申請したいと思いますので、この点御了承願いたいと思います。」(「事件」弁護人の弁論 158 ページ)

例 3. 「私の身が定らぬために『方々』が我他彼此するので、誠に困る。」
(「浮雲」文三の伯母への言葉 99 ページ)

例 4. 「瀬戸が三才社に大分沢山フランスの小説が来ていると云ったので 往って見たとき、ふいと買ったのです」(「青年」純一の先輩木村への言葉 81 ページ)

(2) 「んで」の形で、こなれた口語体として使われているもの。

例 5. 「どこまで山気があるんだかわからないんで、わたしも少々剣呑になってるんですよ。」(「門」大家の言葉 75 ページ)

例 6. 「今そのことを思い出したんで、ちょっと感心してたの」(「現短」 330 ページ)

(3) ていねいな表現として使われているもの。

例7. 「はい、これをおいてゆかれましたので、お返して頂ければ」
 (「現短」390ページ)

例8. 「曾我は、只今、会議中ですので、お知らせいたします」(「現短」
 375ページ)

原口氏は「ので」の現代語の使用状況を毎日新聞(北九州版)昭41年1
 月21日から1カ月分の朝夕刊政治面、社会面で調査された。(注6)

表Ⅱ

	地 の 文	政治面	社会面	計
カ ラ	地 の 文	16	4	20
	会 話 的 文 章	11	32	43
ノ デ	地 の 文	83	86	169
	会 話 的 文 章	37	61	98

そして、「数字の上でのノデの優位は明白で会話的文章におけるカラの集中使用の傾向も看取される」と述べておられる。たしかに地の文における「から」と「ので」の使用比率は1対8で、新聞の記事では「ので専用体」がいまだに維持されていることを示している。会話的文章については「から」の集中使用傾向というよりも、むしろ「ので」の伸長傾向を指摘したい。これは、先の「事件」における「ので」の多使用例とつながりがあるのかもしれない。

最後に私は、朝日新聞の「ビデオテープ」欄50日分を調査してみたが、「から」の使用数31に対して、「ので」の使用は1例もなかった。「ビデオテープ」欄は、テレビの対談番組などの一部を文字化したものであり、話し言葉的性格を持つものであるが、そこで「ので」が使われていなかったということは、通常の話し言葉では「から」使用が多いということを示している。

以上の結果から、現代語における「から」と「ので」の使用状況をまとめると、

1. 明治中期以降に確立した「ので専用体」は標準的な文体としては、現在も生きているが、文学作品など作家が個性を主張する場では、必ずしも採

用されていない。

2. 通常の話し言葉では「から」の使用が圧倒的である。

3. 会話的文章で「ので」が使われるのは、やや改まった場での、よりていねいな言い方及び「んで」の形でこのなれた口語体としてである。

などが結論づけられよう。

Ⅱ 「から」及び「ので」の上接語について

次に「から」及び「ので」を含む文の前件の部分である従属節において、「から」及び「ので」が、どのような上接続語をとるか、両者の上接続語の間には、どのような差があるかを見ていきたい。

表Ⅳ 「から」「ので」の上接語 一地の文一

		動 詞	補 助 動 詞	形 容 詞	助 動 詞								
					ない	だ (ある)	まい	だろう	らしい	ます	です	受身	自発
か ら	浮雲	15 (8)	8 (4)	8	8	4							1
	青年		2 (1)	1	1	5	1					1	
	門	8 (4)	8 (4)	6	4 (4)	21							
	事件	16 (3)	27 (8)	18 (4)	10 (3)	64 (10)						1	
	現短	22 (11)	16 (8)	12 (2)	15 (2)	40 (2)		2	2	1	6 (1)	1	
の で	浮雲	23 (13)	5	9 (7)	1	4						1 (1)	
	青年	28 (18)	3	6 (6)	5	3			2			3 (3)	
	門	85 (46)	15 (8)	8 (5)	14 (1)	10						4 (4)	
	事件	47 (44)	9 (3)	33 (15)	9 (4)	9 (3)						6 (3)	
	現短	47 (30)	12 (1)	25 (9)	10	14 (4)							

()内はうち、助動詞「た」のついたものの数

「だ」には形容動詞、推量伝聞の「そうだ」様態「ようだ」を含む。

表Ⅴ 「から」「ので」の上接語 一会話文一

		動 詞	補 助 動 詞	形 容 詞	助 動 詞							
					ない	だ (ある)	まい	だろう	らしい	ます	です	受身
か ら	浮雲	35 (12)	8	15	23	56	3		1			1
	青年	9 (2)	3	2	3	11				1		
	門	8 (2)	5 (1)	10	6	28 (1)	2			7 (1)		1 (1)
	事件	27 (17)		5	12	44 (6)				16 (9)		
	現短	9 (2)	9	9	5 (1)	22		2		3		
の で	浮雲	2 (1)										
	青年	6 (3)	1									
	門	2	1 (1)		2							
	事件	19 (15)	11 (6)	3 (3)	9 (2)	1 (1)						4 (1)
	現短	4 (14)			2					1 (1)	1	

表Ⅳ及び表Ⅴを見て、まず気がつくことは上接続語として、「から」は助動詞「だ」を「ので」は動詞をとる場合が圧倒的に多いということである。「浮雲」の「から」のみは上接語に動詞が最も多く、例外的な存在であるが、これは先述したように、「浮雲」においては、まだ「ので専用体」が確立しておらず、やがては「ので」の担うべき役割を「から」が担当している故と解釈されよう。

上接語として「から」が「だ」を「ので」が動詞を多くとっている現象の意味を考える時、陳述性とのかわりということに思い至る。ここでいう陳述性とは、「文の構造における2つの側面、文で表現される客観的なことから（素材）に対応する側面と、言語主体の態度に対応する側面」（注7）のうちの後者を指すものとする。助動詞「だ」は、言語主体の判断を断定的に主張する言い方であり、動詞よりも陳述性が強いといえる。受身は「ので」に多いが、時技文法において接尾語に分類されている受身の陳述性は、あまり強くない。「だろう」「まい」は「から」にしかつかないが、これらは助動詞として、最も陳述性の強いものである。渡辺実氏によって叙述と陳述両方にまたがるとされた（注8）推定「らしい」打消「ない」完了過去「た」は、「から」「ので」両方につく。

以上の事実から、「から」の上接語には「ので」の上接語よりも陳述性の強い品詞がくる傾向があると結論づけることができる。

(1) 「から」の上接語の例

例 9 新聞社が路花を推戴したことがあるのではあるまいから、路花の思想が、自然に全体の調子を支配する様になって、あの特色は生じたのだろう。
(「青年」98ページ)

例 10 彼方のガラス戸は、私の狼狽を二倍にも三倍にも声高に告げるだろうから、身の隠し場とて、こうなると何とも頼りない湯気の中しかなかった。(「現短」95ページ)

例 11 あなたの方の都合もありでしょうから、そのことを御承知願うようにと、私が、にくまれ役を言いつかって…。(「現短」385ページ)

例 12 10時の開廷までに出勤すればいいのだから、普通の公務員よりおそ目である。(「事件」21ページ)

例 13 みんなどこかへ昼間つとめているひとらしいから、午後は家の中がシンとしていて……。(「現短」344ページ)

例 14 この事件では事前準備は、されていなかったから、この日の予定は、ここまでである。(「事件」63ページ)

(2) 「ので」の上接語の例

例 15 店が、かたまっていて、人目があるので、口論はやめた。(「事件」130ページ)

例 16 彼とても愉快な仕事ではないので、自然、声もとげとげしくなる。(「事件」62ページ)

例 17 宮内が来ないので、開廷するわけに行かない。(「事件」215ページ)

例 18 髪を刈ったので、てっぺんがとがった頭の形があらわになったのを、父親の喜平は認めた。(「事件」32ページ)

例 19 看守もこの時間だけ、監視の義務から解放されるので、のんびりと弁当を使う。(「事件」129ページ)

例 20 何か書き掛けていたらいいので、「お邪魔なら又参ります」と云うと……。(「事件」97ページ)

吉井量人氏も「から」と「ので」の前件の表現形式の違いに着目されてい

る。氏は、上接語の活用形の違いが「から」と「ので」両者の違いを生じさせている要因であると説かれている。(注9)「から」の場合、上接語に終止形をとるために、前件が意義的完結体となり、言語主体の断定の気持が託される。それに対して「ので」の場合は、上接語が連体形であることによって、前件に文脈上の完結性はなく「ので」を介して後件へ結びつくことを前提として使われていると説明されている。そして、渡辺実氏の陳述の定義に従えば、「から」の上接語終止形には、陳述の作用があり、「ので」の上接語連体形には陳述の作用が働いていないということにもなると述べておられる。

また、南不二男氏も従属句と陳述性のかかわり合いを認めた説を提出しておられる。氏は従属句を3つに分類され、A類としてその構成要素の種類が最も限られていることがらの段階のもの、B類を中間的なもの、C類を最もその範囲が広く陳述的なものとされ「ので」をB類に「から」をC類に分類されている。(注10)

いずれにしろ、上接語の陳述性と「から」「ので」の意義、機能の差異との関係については、更に調査、分析、検討する必要があるだろう。

■ 後件の表現について

次に「から」「ので」を含む条件文における後件の部分、帰結文について調査してみた。帰結文の叙述の違いに注目されたのは永野賢氏であった。氏は「『ので』のあとには、どちらかというと、客観的な描写など平叙文的なものが来やすく、『から』のあとには、命令禁止、質問など相手への働きかけの強い主観的な表現が来やすい」(注11)と述べておられる。

私は「から」及び「ので」の帰結文の文末を次表のように分類した。(表Ⅵ、Ⅶ)

「地の文」「会話文」の両方に共通していえることは、「から」の文末表現は「ので」に比べて、品詞的にも意味の上でも、多様性があるということである。「ので」の文末が動詞、補助動詞、形容詞、打消の助動詞「だ、である」などに限られているのに対し、「から」には種々の助動詞がきて、推量、意志、命令、疑問など多彩な文末表現を担当している。また、「会話文」においては、「から」の文末に終助詞がくる場合が多い。以上の結果は、上接語の場合と同じく、「から」の担当する守備範囲の広さと、陳述性の強さ

表Ⅵ 帰結文の文末

一 地の文一

	浮		雲		青		年		門		事		件		現		短	
	か	ら	の	で	か	ら	の	で	か	ら	の	で	か	ら	の	で	か	ら
動詞	20(3)	23(3)		36(28)	3				10(6)	106(87)	26(7)		26(21)		37(5)		42(37)	
補助動詞	5(3)	9(7)		13(6)	2(1)				6(5)	22(17)	16(7)		21(18)		7(4)		15(11)	
形容詞	6(1)	4			2				9(6)	4(4)	13(6)		6(3)		12(2)		2	
名詞	1														4			
だ、である	2			7	1				14(2)	14(5)	36(18)		39(12)		25(4)		20(6)	
ます															3(2)		4(3)	
です															6		7(2)	
受身											1		1(1)					
打ち消	6(1)	6			1				11(8)	12	19(7)		8(1)		8(2)		7(3)	
希望																		
推定													3(2)		1			
疑問													1				2	
推量	2										1(1)				11		5	
意図	2																	
勧誘、命令、依頼																		
否定意志、推量	1										1							
禁止																		
不必要、当然																		
その他の																		

()内はうち助動詞「た」のついたものの数

表Ⅶ 帰結文の文末 一 会話文一

	浮雲		青年		門		事件		現		短
	から	で	から	で	から	で	から	で	から	で	
動詞	7	1	5<2>(2)	1(1)	4	1(1)	7(2)	7(3)	7<4>	2(2)	
補助動詞	8<1>		2				8(3)	3(1)	5(1)<3>	1(1)<1>	
形容詞	17<7>			1	7<4>		9(1)<1>	2(1)	3(1)	1	
名詞	7	1					2<1>		10<1>		
だ、である	24<10>		2		4		15<5>	1<1>	7<2>	2(1)<1>	
ます	7<3>		2(2)		7<1>		20(3)<3>	9(6)<2>		2	
です	6<3>		4<1>	5	14<4>	5	43(4)<6>	25(4)<3>			
受身、可能			1				1(1)		2		
打消	20<10>		5		6<1>		23(5)<5>	3	9(1)<4>		
希望	1							4	1		
疑問	6		1		1		5		4		
推量	6		2		12		6	2<1>	2		
意志	7		1		7		2		1		
勧誘、命令、依頼	14		9		9		16<1>	1	15	4	
否定意志、推量											
禁止			1						1		
不必要、当然							2				
その他の		1			1						

()内はうち助動詞「た」のついたものの数
<>内はうち、終助詞のついたものの数

を、示しているといえる。

しかし、以上の結果が成立するのは、「浮雲」「青年」「門」の場合であり、「事件」「現短」では必ずしもそうではない。「事件」「現短」では「ので」にも推量、意志、疑問、命令などの表現が散見されるのである。この事実、冒頭の永野氏の指摘は、現代文では必ずしも成立しないことを示しており、注目すべき現象である。

例 2 1 あのN道に沿った地域には叔父の幼少時代の思出が、いっぱい詰まっているので、あの道を歩こうと思ったのであろう。(意志、推量、「現短」171ページ)

例 2 2 誰もいないところで死んだので、調べて貰ったがよいと……。 (勧誘「現短」146ページ)

例 2 3 近所の人、次ぎ次ぎ死ぬので、生母の死と結び付いた泉を、思い出したのだろうか。(疑問、「現短」130ページ)

例 2 4 縁側から庭の大部分を、見降すことができるので、いつとはなく2匹の犬の通る道が一定していることに、気付いたのであろう。(推量、「現短」156ページ)

いずれも「ていねいな改まった表現」ではない点でも注目される。地の文における「から」の多使用傾向と共に「ので専用体」の原則の崩壊現象であり、今後の推移が注目される。

最後に、もう1つ「から」と「ので」のちがいとして指摘できるのは、「ので」の文末は、助動詞「た」をとる場合が多いことである。この傾向は「地の文」において特に著しく、前件の上接語でも共通して見られた現象である。「ので」の構成要素である単体助詞「の」の性格と関連があるのであろうか。

以上の結果から「から」と「ので」の特質をまとめてみると、

1. 前件における「から」の上接語は「ので」に比べて、品詞の面でも活用形の面でも陳述性が強いと考えられる。
2. 後件の文末も「から」の方が担当範囲も広く陳述性も強い。これは上接語の場合と共通した傾向である。
3. 「ので」の拡張現象ともいえるべき「ので」による主観的表現もいくつか見受けられる一方、文学作品などでは、地の文に「から」が多用される場

合もある。「ので専用体」の原則の崩れが見られると言えよう。

4. 助動詞「た」は上接語、文末とも「ので」の文で使われることが多い。

注1. 安田章『岩波講座日本語7 文法Ⅱ 助詞②』

注2. 日野資純「いわゆる接続助詞『ので』の語構成」『国語学52』

日野氏は準体助詞「の」に格助詞「で」がついた「ので」と「故に」の意の「ので」とは意味も語構成も異なると主張されている。

三浦つとむ『日本語の文法』

三浦氏は「ので」の「の」を形式名詞、「で」を判断表現助動詞「だ」の変化と解釈されている。

注3. 注1に同じ

注4. 『国語学110』

注5. 『静岡女子大学研究紀要第4号』『「ノデ」の定着』

注6. 注5に同じ

注7. 南不二男『現代日本語の構造』

注8. 『国語学13、14』『叙述と陳述』

注9. 注4に同じ

注10. 注7に同じ

注11. 『伝達論にもとづく日本語文法の研究』『「から」と「ので」とはどう違うか』

(東海大学講師)